

坂本れきし部 郷土のたから

茄子川焼

「茄子川焼」という陶磁器をご存知ですか？ 江戸後期から明治時代にかけて、茄子川は陶磁器の一大産地として知られていました。歴史の中に埋もれかけている郷土の宝「茄子川焼」について、原益彦先生にうかがいました。



原益彦先生
郷土史研究家
(元市職員(学芸員))

東海湖がもたらした豊かな土壌

太古の昔、東海地方は琵琶湖の6倍ともいわれる巨大な湖があり、多くの自然の恵みをもたらしました。その一つが「陶土」。三重県の萬古焼、愛知県の常滑焼、瀬戸焼、そして東濃の美濃焼、そのすべてが東海湖の恵みによるものと言われています。湖の北岸に位置する坂本にも、優良な陶土がふんだんにありました。



▲ 中山道広久手坂にある篠原郁郎さん宅前には「茄子川焼」の案内看板があります。



▲ 広久手坂

丸右衛門窯、利平治窯がこの坂道沿いに築かれた。坂の峠と麓に茶屋が2軒あり、土産物を販売していた。

そして陶器の産地となった茄子川

陶土に恵まれていた坂本一帯は、平安時代から壺や甕、すり鉢などを作っていました。1832(天保3)年、大きな駆籠がやってきました。丹羽丸右衛門が広久手に開窯。妻木から加藤喜兵衛を師に招き、窯業に力を入れました。そして1845(弘化2)年、篠原利平治が妻木より職人 水野采蔵を迎え、「茄子川焼」として一気に発展していきます。

初期は「相馬焼」の技術を取り入れたものが中心でした。左馬の意匠は「右に出るものはなし」という意味で縁起が良く、中山道を行きかう人々がみやげとして買っていき、「茄子川焼」の名前が広がっていきました。



鉄釉浮き左馬徳利
奥州発祥の相馬焼を取り入れた作品



茄子川焼の由来 (加藤真人) 書 — 篠原郁郎さん提供 —

時代に翻弄された茄子川焼

その後、九谷焼の技法を取り入れたり、舶来の釉薬「コバルト」を使うなど、新たな技術を積極的に導入し、茄子川焼はますます発展。1890(明治23)年、茄子川焼は年間に20万個の生産数を誇る産地へと成長しました。

しかしここを頂点に、茄子川焼は急激に衰退します。その原因は景気の悪化と、1891(明治24)年の濃尾地震、そして、1902(明治35)年の中央線の開通でした。多治見や土岐の美濃焼が、貨物列車を使って大量に運ばれてきて、あつという間に広まってきました。1912(明治45)年、一人の陶芸家の窯以外はすべて廃窯し、茄子川焼が終りを告げました。



染付山水文皿



明るい発色で人気を得たコバルト釉薬
染付草花文菓子鉢

「一人の陶芸家」については、次回ご紹介します。茄子川焼が世界に誇る陶芸家のお話です。



文久字文壺

もしかすると、あなたの家の蔵や倉庫に、100年前の茄子川焼が残っているかもしれません。茄子川焼は郷土の宝です。ぜひ探してみませんか？